



# 日本ラテンアメリカ学会 会報



AJEL

1995年2月10日

---

No. 52

1. 学会最初の公開講演会
  2. 日米地域研究コンファレンス
  3. 理事会報告
  4. 研究部会報告
  5. 近著紹介
  6. 海外ラテンアメリカ研究センター紹介（15）
  7. 学術・文化情報
  8. 近着会員業績
  9. 事務局から
- 

1. 学会最初の公開講演会  
－アメリカ大陸の古代文明－  
昨年末、成功裡に終わる

昨年12月13日東京・六本木の国際文化会館大会議室を会場として、本会としては最初の研究成果公開学術講演会が開かれ、ほぼ期待した成果をあげた。この講演会は、アンデスとメソアメリカの古代文明に関して「日本人研究者の発掘と研究の成果」（講演会タイトルの副題）を紹介することを目的とした。

講演者と司会には、本会会員があたり、京都からの大井邦明氏と甲府からの中村誠一氏などの遠方からの講演者を含めた4人により、午前と午後それぞれ2つの講演がOHP、ビデオ、スライドなどを駆使して行われた。事前に返信用葉書を同封した封書で申し込みを受け付けるという方法で参加者を制限したが、定員120人を上回る申し込みがあり、最後の

約10数人は受け付けられない結果になった。

本来の趣旨は、中学生以上の学生および社会人を対象に社会的に関心が強いと思われるテーマについて成果普及を行い、学会の活動に対する社会的支持と将来の研究者の卵の育成にあったが、都内の適切な会場を週末ないし休日に借りることができず、本来の構想を縮小し、対象も大学生以上にせざるをえなかった。大学生が半数以上を占めていたが、社会人のなかには教育委員会、教員もあり、熱心な雰囲気は大学の講義以上であった。

結果としてみると、中高生を含めた場合、講演の内容を相当変えないと理解されないと思われた。今回の経験を生かし、同様あるいは別の分野の論題に関して、他の大都市でも逐次実行していくことが必要であろう。

アメリカ合衆国在住のシカン文明の研究者である長島泉氏は、上野の国立博物館での「シカン黄金文明展」が開催された後である

震災地域の会員へお見舞いとお願い  
阪神大震災地域にお住まいの会員の皆様に対し、心よりお見舞いを申しあげます。理事会では会員の方々の動静を手分けして調査しておりますが、不幸にして直接被害を被られた方、またその会員の動静をご存じの方は会報末尾に記載しております学会事務局までご連絡をください（出来ればFAXで）。

ことと、予算に招聘費用が含まれていないことから見送らざるをえなかった。関、大貫、加藤諸氏が発掘調査したクントゥル・ワシ遺跡の発掘とその後の現地博物館の建設などについては、1月6日夜のNHK番組で詳細に紹介された。

発表の内容は以下のとおり。

午前の部 司会：高山智博

中村誠一「東南メソアメリカ周縁地域における考古学調査とその成果—周縁地域から見た古代マヤ文明盛衰過程の再構成—」  
大井邦明「マヤの大土造都市遺跡カミナルフュの発掘から」

午後の部 司会：加藤泰建

関 雄二「ペルー北高地の形成期と祭礼センター」  
大貫良夫「文明と神殿—クントゥル・ワシ遺跡発掘から—」

## 2. 日米地域研究

### コンファランス近づく

来る3月6日より8日まで東京国際文化会館を会場とし、日本の国立民族学博物館地域研究企画交流センターおよび同会館とアメリカ合衆国全国地域研究学会審議会NCASA (National Council of Area Studies Associations)の共催により、日米の関係諸学会の代表を集め地域研究に関する研究集会が開かれる。

地域研究企画交流センターは、昨年6月に設立された国立の大学共同利用施設で、すでに国内の地域研究者にはデータベース作成のためのアンケートを送付しているので、その概要は本会会員にも知られていよう。米国のNCASAは、国立ではなく、任意団体であるので、性格の違いはあるが、両者ともそれぞれの国内で諸学会のまとめ役になることを期待されている。

日本側からは、本学会のほか、日本アフリカ学会、日本中東学会、日本アメリカ学会、日本スラブ東欧学会(ロシア東欧学会と合同)、日本南アジア学会、アジア政経学会の7団体、米国側からは、LASA(ラテンアメリカ学会)、AAS(アジア研究学会)、AAAS(S(スラブ研究学会)、MESA(中東学会)、ASA(アフリカ学会)、ASA-USA(アメリカ学会)の6団体が参加する。

主要なテーマは、①地域研究の知的関心分野、②地域研究の方法と活性化、③日米および研究対象地域の学会、研究者間のマルチラテラルな協力推進などである。①に関しては、国家、文化、地域などについての総合的な研究の重要性、地域研究と地球規模の問題との関係、世界情勢によって認識がうける影響などが論じられる。

3月8日午後には上智大学イペロアメリカ研究所を会場として、本会理事とLASA代表のReid Reading (Executive Director)、Peter Smith (Latin America, Japan and U.S. Task Force)が両学会の今後の交流などについて意見交換し、あわせて研究機関紹介の一環とする予定である。

## 3. 理事会報告

### ○第70回理事会

日 時：1994年11月12日(土)

場 所：上智大学

出席者：山田理事長、アンドラーデ、石井、松下、三田、畠、田中(書記)(委任：二村、細野 欠席：堀坂)

### 1. 第16回定期大会について

組織委員会の大貫委員長、高橋委員出席のもとに、大会を6月17日(土)・18日(日)、東京大学駒場校舎で開催することに決定した。記念講演者は準備委員会で調整する。

シンポジウムのテーマは「文明の衝突とラ

テンアメリカ」。また一般の参加者からは参加費を徴収するとともに、なるべく費用のかからない方法を考えることになった。

## 2. 年報編集について

石井理事より10月末の投稿申し込み締切の段階で、論文8点（うち英文、西文それぞれ各1点）、研究ノート3点計11点の投稿希望があり、書評は3点を取り上げる予定で従来通りの手続きで審査する、との報告があった。

## 3. 國際交流について

FIEALCを今後とも本学会との協力機関とすることを確認した。山田理事長より、日米地域研究シンポジウムが、1995年3月6日～8日、日本で開催される予定との報告があり、本学会からは、山田理事長、大貫良夫会員が参加することに決定した。オブザーバーの人選については、山田理事長に一任することで合意した。

## 4. 新入会員審査、退会会員の承認

5名の入会と3名の退会を承認した。

## 5. その他

本学会が主催するシンポジウム「アメリカ大陸の古代文明」の地方参加者（発表者）の旅費として必要な場合は3万2千円を限度に、学会負担とすることを了承した。

### ○第71回理事会

日 時：1995年1月21日（土）

場 所：上智大学

出席者：山田理事長、アンドラーデ、石井、

松下、二村、畠、田中、三田（書記）

（委任：堀坂 欠席：細野）

## 1. 神戸震災について

会員の被災状況を早急に把握することになった。

## 2. 年報編集について

次号年報に論文4点、研究・サーベイノ

ートが3点、書評2点が最終的に投稿されたことが報告された。

## 3. 國際交流について

次期大会の記念講演者依頼および招待に関し経過報告があった。LASAのLatin America-U.S. Japan Relationsのタスク・フォースのメンバーについて話し合わせた。

## 4. 研究部会について次の報告があった。

東日本部会、中部日本部会ともに3月に研究部会を開催予定。西日本部会は1月28日と3月に開催の予定。

## 5. 研究部会運営費に関する内規について審議された。

## 6. 日米地域研究カンファレンスについて

パネラーとして本学会から山田理事長および大貫会員が出席し、オブザーバーの調整には理事長があたることになった。同カンファレンスに出席するLASAの研究者との交流は3月8日（水）午後2時より上智大学イベロアメリカ研究所で行うことになった。（記事2参照）

## 7. 「研究成果公開促進費」によるシンポジウム開催について理事長より報告があり、会計等を含む公式の報告は、理事長および田中理事が取りまとめることになった。今後「研究成果公開促進費」の募集に対応するため、松下、畠、三田の各理事が担当することになった。

## 8. 新入会員7名を承認し、退会1名を了承した。

## 4. 研究部会報告

### ○東日本部会

1994年11月5日（土）、上智大学において研究部会が開催された（出席者15名）。あえて共通テーマとして掲げたわけではないが、現在のラテンアメリカにとって最も重大な課

題の一つである「民主化」に絡めた3名の報告があった。

第1報告（岸川）では、1980年代の野党PAN（国民行動党）の躍進を北部企業家層の政治参加と関連づけながら、メキシコの民主化における野党の役割が明らかにされた。8月の大統領選挙の余韻が残るなか今回の選挙に質問が集中し、今後のPANとPRI（制度的革命党）の関係やNAFTAの影響などについて、質疑応答が行なわれた。第2報告

（内田）では、「選挙制度改革は政治を変えるのか」という問題意識から、ウルグアイの事例が分析された。日本ではウルグアイの政治研究がほとんど行なわれていないため、複雑な制度について様々な質問が出たが、「複雑な選挙制度が実施可能なのは人口規模が小さいからではないか」というコメントが印象的であった。第3報告（竹内）では、冷戦後の開発援助政策見直しの動きが論じられ、「良い統治」（民主化）をコンディショナリティとする議論があるが、その定義が問題であるとの指摘がなされた。援助対象国・援助理念の見直しが進むなか、ラテンアメリカを取り巻く状況は一層厳しくなるようである。

これら3報告の要旨は以下の通りである。

（畠 恵子）

#### ○第1報告：メキシコにおける

##### 野党PANと企業家層の政治化

岸川 毅（上智大学）

1980年代、メキシコのPRI体制は二つの政治的挑戦の波を受けた。一つは83年から86年にかけて頂点に達した野党PANの躍進、もう一つは88年のPRI分裂に始まる左派の挑戦である。本報告ではこのうちPANの躍進に焦点を当て、その背後にある諸要因を考察した。この動きは、メキシコ革命以来体制外にあって正当性を与えられなかった「右派」、すなわち企業家層、カトリック勢力、中間層

以上の階層が、82年の経済危機後、PRI政府との政治協約が崩れるなかで自立化し始めた結果として起こった。このうち特に急進化したのが北部を中心とする企業家層であり、その政治的要請表明のチャネルの役割を果たしたのがPANであった。そこに見出だされるのは自由民主主義への要求であったが、いまだ階級格差・地域格差の著しいメキシコにおいてPANの示した民主化の選択肢には限界もあった。

#### ○第2報告：制度的改革は民主主義再生の

##### 切り札か—ウルグアイにおける 政治制度改革論の系譜—

内田みどり（中央大学）

ウルグアイでは今世紀初頭以来、紛争の平和的解決が制度化されている。しかしその制度にはいくつかの問題点がある。その特徴は大統領制にかわる行政府の合議制=colegiadoの導入、下院の比例代表制とel doble vote simultáneo（同一政党内で複数の大統領候補を立て、最大得票政党の第1位候補を当選とする）を柱とする選挙制度改革、さらに1930年代に制定された政党法（lema法）、全公職を同一日に選ぶ、である。el doble vote simultáneoとlema法と全公職を同一日に選ぶことが重なると、①最大得票候補が大統領になれない、②議会内で大統領の派閥が少数派足らざるを得ない、③政策上・イデオロギー上の亀裂が常に党内に存在する等の問題が生じ、政治的不安定を招きやすい。しかし最大の問題は、大恐慌以来の経済危機に際し、政党が経済政策を提示することよりも、「政治が非効率だから政治制度をどう変えるか」の争いに終始してきたことであろう。

○第3報告：OECD開発援助委員会(DA)  
○)における90年代のラテンアメリカ  
援助政策についての議論

—民主安定化政策を中心として—

竹内恒理(つくば国際大学)

冷戦体制の崩壊後、開発援助の在り方を巡って大きな変化が起こっている。第1の変化は援助対象地域の見直し問題であり、これは伝統的途上国への支援に代わって東欧、新独立国家諸国(NIS)が援助の対象となりつつあること、第2は、援助理念の変化であり、従来の戦略としての援助理念に変わる新たな援助理念の構築が必要となっている点である。

世界の援助資金の伸び悩みを理由として近年経済成長が著しい東アジア諸国やラテンアメリカの一部の諸国を政府開発援助(ODA)の対象外、いわゆる世銀の融資基準の「卒業」に習った制度の導入が検討されつつあり、これらの地域に属する国の一一部は1996年からODAの供与が記録されないこととなった。ラテンアメリカ諸国に対する90年代のDAC諸国の援助政策にも、このような変化が現れており、とりわけ「良い統治」(good governance) (すなわち民主化)を援助のコンディショナリティとするDACでの議論が注目される。

○中部日本部会

1994年秋の中部日本研究部会は、11月19日午後2時から名古屋大学で開催された(出席者13名)。当日行われた二つの報告の要旨は以下に掲げるとおりである。鶴田報告は数式を駆使した高度に専門的なものであったせいか、必ずしも活発な議論が展開されたとは言い難いが、出席者一同、地域研究の新たな可能性に思いを馳せた印象的な報告であった。一方ニカラグア現代史に題材を求めた小原報告は、緻密な実証主義的歴史分析であった。この報告に対しては、ニカラグア現代史にお

ける40年代の位置づけ、カトリック教会の役割など、比較的マクロな観点からの質問、コメントなどが寄せられた。

今回は大学院生の意欲的な参加が目立ったのに対し、一般会員の出足がやや鈍かった。次回はより積極的な参加が望まれる。

(二村久則)

○第1報告：ブラジルとEUの

貿易関係に関する実証分析

—地域別輸出入関数を用いて—

鶴田利恵(名古屋大学)

ブラジルとEUの1970年以降の貿易関係は、ブラジルの工業化と関連する貿易政策の変化やEUの域内政策の影響を受けて推移した。今回の発表ではこれらの諸政策を分析した上で、回帰分析によってブラジルのマクロおよび品目別の輸出入関数の推定を行った。

第16回定期大会の

研究発表報告者募集のお知らせ

第16回定期大会は、本年6月17日(土)、18日(日)の両日、東京大学教養学部を会場に開催されます。

研究発表をご希望の方は、①発表題目、②分野(言語、文学、政治経済、文化人類学、歴史等)、③スライド、オーバーヘッドプロジェクター、ビデオ装置使用の有無、④発表希望日――を2月末日(必着)までに大会準備委員会までハガキでご連絡下さい。なお、発表日はご希望に添えない場合もありますので、予めご了承下さい。

〒153 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学教養学部外国語科高橋均研究室  
日本ラテンアメリカ学会大会準備委員会

TEL 03-5454-6436

FAX 03-5454-4316

その結果、EUの市場拡大はブラジルの総輸出にはプラスの効果をもたらしたが、品目別に見ると、コーヒー・工業製品にはむしろマイナスに作用したことが明らかとなった。また、鉄鉱石と繊維はEUの輸入数量割当などの政策の影響を、工業製品全般については価格要因の影響を強く受けることなどが指摘される。

他方、輸入については、80年代前半のブラジルにおける実質所得の減少がEUからの工業製品輸入を大きく減少させた。これを対外債務の増大によって対処しようとしたが、実質所得の低下によるマイナスの効果を相殺するまでには至らず、結局工業化の遅れと債務危機を発生させることになったといえる。

#### ○第2報告：ニカラグア—1944-48

##### 年期の労働運動

小原雅彦（津島高校）

ソモサ独裁政権下の1944-46年に、労働運動はニカラグア革命以前としては最大の高揚期を迎えた。労組の組織化が進み、その全国組織たるニカラグア労働者総連合、労働者を基盤とする社会党が結成された。労働争議も頻発し、賃上げや労働法（1945年施行）の制定・遵守を求めていた。

このような動きは、反対運動の活発化で危機に直面したソモサ政権が、労働者の支持を得るために打ち出した労働政策によるところが大きかった。しかし労働者は社会党系とソモサ系とに分かれていたものの、この状況を利用して階級としての主張を強めていった。だがソモサ個人に依存するあまり、独裁政権に対し一貫した対応がとれず、それ故に1948年の大弾圧を機に労働運動は低迷する。

1920年代に活発化するオブレリスモ運動、続く1930年代の労働者党という保守党・自由党に対抗する第3の勢力作りは、1940年代中

頃には社会党によって担われた。労働者はこの党とともに、過去過大の労働運動を展開したのである。

#### ○西日本部会

当研究会は、12名の参加を得て1994年11月19日、立命館大学・国際平和ミュージアムの会議室で行われた。2つの報告には特にコメントーターはつけられなかったが、報告後には時間を延長して活発な討論が行われた。二つの報告は方法論も対象もかなり対照的なものであり、ラテンアメリカ研究という機会から同一にくくって並べて研究会を開くには、やや違和感があったことは否めないだろう。多様な関心を持つ出席者の間で、十分な理解が交換されたとも言いがたい。だが、学問の枠を越えて知的交流が行われたことは極めて新鮮であったし、同時に、日本における若い研究者によるラテンアメリカ研究のすそ野の広がりを感じさせた。報告の概略は以下のとおりである。

（小林 誠）

#### ○第1報告：アベル・ポッセ（アルゼンチン）

##### の小説『旅人の長い黄昏』について —歴史小説の新たな手法を求めて—

松本健二（大阪外国语大学）

ポッセは以前に『ダイモン』と『楽園の犬』という歴史小説を発表しているが、今回取り上げる『旅人の長い黄昏』はこれらと比較すると悪魔的リアリズムが薄れ、ややオーソドックスな歴史小説となっている。この小説は、16世紀後半に活躍した実在の軍人で後にラ・プラタ総督となったカベサ・デ・バカの手記という体裁を取り、手記が書かれている時点のセビージャのエピソードと主人公が回想するフロリダやパラグアイでの冒険とが同時進行するという構成を持つ。

主人公は未知の他者に対しても開かれた人

物として描かれ、インディオ、制服者、国王、クロニスター、詩人、年下の愛人、モーロ人などとの対話を通じ、自己を批判的に認識していく。この自省を通じて描かれているのは、他者としてのインディオの存在であり、そこにユダヤ教・キリスト教的なものを相対化しようというポッセの視点が見いだされる。報告後には当然のことながら、主に2つの文化の関係をめぐって質疑応答がなされた。

#### ○第2報告：中米における政治変動サイクル

##### —世界システム論から見た、 政治変動の循環と趨勢—

竹内史子（神戸大学大学院）

中米は、世界システムにおける経済長波の上昇期ごとに世界システムにいっそう堅固に組み込まれた。その例を順に挙げれば、18世

紀のスペイン継承戦争、19世紀のコーヒー栽培の導入と英米の中米をめぐる対立、20世紀前半のアメリカの進出とアメリカ資本によるバナナ栽培の導入、20世紀後半の冷戦とアメリカの覇権行使に応じた反米勢力形成である。また、その結果である経済・社会構造の変化が、続く経済長波の下降期における政治変動の要因となり、旧覇権国の影響下から新覇権国の影響下へと移行する形で中米で政治変動が生じた。

ここでいう覇権国とは、15世紀末～1713年のハプスブルク家、1815～73年のイギリス、そして1945年以降のアメリカである。報告後、経済長波や政治システムへの参入といった概念の構成に関わる理論的问题や、覇権の実体や中米の政治変動などについての歴史的問題について、質疑応答が行われた。

#### 5. 近著紹介 グスタボ・アンドラーデ・中牧弘允編『ラテン アメリカ宗教と社会』新評論、1994年、 271ページ。

紹介者：桜井三枝子（大阪経済大学）

「世界のカトリック教徒の約半数がラテンアメリカに住んでいる」という文から始まる本書はラテンアメリカ・シリーズ第6巻として、文化（社会）人類学、宗教学、政治学、心理学などを専門分野とする11人の研究者による論考で構成されている。本書は2部構成となっており、「第1部ラテンアメリカのキリスト教」では主に歴史的視点からキリスト教関係6章を、また「第2部大衆社会の到来と宗教」ではラテンアメリカ各地の祭り、聖人信仰、民衆カトリシズム、日本宗教、説話、エスピリティスモ、医療問題をテーマとする

7章、あわせて全13章（うち2章は各部総論）を収録している。マヤの儀礼（文化人類学）研究をしている紹介者にとって、「木を見て森を見ず」ではないが専門地域の資料に偏重し、ややもすればラテンアメリカの宗教と社会全体像を見失いがちになる時、本書（特に第1部）は迷路にはまった自分自身を立てなおす羅針盤的効き目をもっている。その意味でどの章も読み応えがあり、夢中になって読み進ませる内容構成となっている。

小林一宏論文は、イスパノアメリカにおけるカトリック教会の歴史を「発見」から独立

まで簡潔明瞭にまとめ、ムスリム勢討伐のサンティアゴがイベリアのキリスト教徒保護者として崇拜されたように、メキシコのグアダルーペ信仰にはキリスト教伝説に起源を発するものの異教信仰のキリスト教化である点に並行現象が認められるとしている（2章）。

G. アンドラーデ論文（6章）はラテンアメリカにおけるカトリック教会と国家の関係について、スペイン・ポルトガル支配下（1492-1810）、独立戦争期（1810-25）、独立国家の強化（1825-50）、決定的亀裂（1850-1930）、社会紛争とカトリック教会（1945-93）と歴史的に概観している。

V. ローシャイタ論文（3章）とJ. ミラ論文（5章）はブラジルにおけるカトリック教会に着目し、前者は国民と共に歩む教会とその諸形態（キリスト教世界としての教会、国教会設立計画、トリエンント教会、神の民としての教会）を歴史の流れにそって言及している。後者は人類学的視点から、アフロ・カトリック宗教は個人主義や全体主義を超越した宇宙観を有しており、身体と精神は別々だとしたギリシア哲学とそれに汚染されたカトリックの宇宙観とその心を異にしているとし、公的立場では皆がカトリックであるが人間として生きていくにはアフリカ宗教を必要としているから、そこから生まれたのがアフロ・カトリック宗教であると述べている。また、ラテンアメリカ社会の構造と社会の近代化・工業化・都市化に伴う急速な変化に関連して急成長しているプロテstant伝道について興味深く解明し、民衆宗教を見直す鍵として「ことば」に注目しているのが藤田富雄論文（4章）である。

第2部では、メキシコはユカタン半島の事例から、祭りに参加する人々の意識は共同体的「しきたり」から個人的「プロメッサ」に変化しつつあると指摘する吉田栄人論文（8

章）と、ディアス・ゴメスの戯曲『プロメッサの弁済人』の登場人物を通してブラジルの民衆カトリシズムとアフロ・ブラジリアン宗教の分析・解釈を試みた荒井芳廣論文（9章）は、両者ともにプロメッサ（誓願・約束）をキーワードとして祭礼と戯曲という異なった背景から宗教文化を読み解く面白さがある。

面白いといえば「サカオホス（目玉とり魔）」の噂と事件からペルーの急速な近代化の裏面を外国人・眼球・学校・子供・国外売買などを点から線へと点描している加藤隆浩論文（11章）があげられる。また、疫学の類比を用いて「教団宗教」としての日本宗教の展開をしている中牧弘允論文（10章）は、日本の新宗教が日本社会の大衆化過程ではたした役割を想起しつつ、日本宗教が日系人社会を基盤とするエンデミック（風土病的）な宗教から非日系人を中心とするエピデミック（流行病的）な宗教へと変貌をとげている意味は、階層的大衆社会から無階層の大衆社会にむかって感染力を發揮する可能性があると生長の家とPL教団の例をあげて言及している。

最後の2章のテーマは医療と宗教に関係している。角川雅樹論文はペルトリコ症候群とよばれる精神病理現象の治療に効果的なエスピリティスモ（心霊術）について解りやすく言及している。武井秀夫論文（13章）では、コロンビア・アマゾンのトゥユカ族におけるキリスト教と保健所のもたらした影響が、先住民の世界観を変容せざるをえない状況を参与観察調査でえた資料をもとにヴィヴィッドに報告していて面白い。

各章巻末に掲載されている参考文献リストと解説は、こうしたテーマをより深く研究したい読者にとって有益である。今後、先住民文化のより濃厚なメソアメリカやアンデス地域の論考に神学的问题を加味して本書の続編として出版される日を期待している。

## 6. 海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (15)

ヨーク大学ラテンアメリカ・カリブ・リサーチ・センター

(Centre for Research on  
Latin America and the Caribbean, CERLAC)

トロント市の中心街から地下鉄とバスを乗り継いでおよそ50分、C E R L A Cは広大なキャンパスを誇るヨーク大学の一角にあった。晩夏の強い日差しのなかにも秋の気配がただよい始めていた昨年9月、カナダの対ラテンアメリカ関係を知りたくて訪れた。快く筆者を迎えてくれた臨時所長のJoanna W. A. Rummers先生によると、同センターは「ラテンアメリカ地域を対象としたカナダの大学唯一の研究機関」ということだ。

C E R L A Cの発足は1978年11月。ヨーク大学のほか、同国政府の発展途上国援助機関であるカナダ国際開発庁(CIDA)や国際開発リサーチ・センター(IDRC)、カナダ社会・人文科学リサーチ・カウンシル(SSHRCC)などの資金援助によって設立された。

このため同センターはヨーク大学の研究機関ということに留まらず、カナダにおけるラテンアメリカおよびカリブ海地域に関する学際的な研究ネットワークのセンター的な存在となっている。研究所のメンバーは70余人で、ヨーク大学各学部の専任教員のほか、トロント、カールトン、オタワ、ブリティッシュ・コロンビアなどカナダの主要大学や専門機関におけるラテンアメリカ研究者が参加している。

教育面では、ヨーク大学の大学院プログラムと共同してラテンアメリカ関係の講座をもっており、登録学生数は約80人。規程の科目を終えた学生にはラテンアメリカ研究のM.A. および Ph.D の学位を授与している。

センターの特徴のひとつは、アンデス諸国や中米、カリブ海地域の研究機関と連係して、現地調査、研究者の養成、住民による自立活動への支援などを行っている点に

ある。その一例として、Ecuador Program, Community based self-help organizations in Chile, Community power in the Caribbean and Central Americaなどをあげることができる。またカナダ政府や国会などとも緊密な関係をもっているようだ。

C E R L A Cの入っている研究棟には、アジア・太平洋研究センター、国際関係研究所、文化人類学関係の研究所等、多民族国家カナダの関心を象徴するような研究機関が入居しており、学際的、地域横断的な共同研究が行えるところも魅力になっている。研究棟を案内してもらっていると、ブラジル人の研究者にはばったり会うなど、多彩な顔ぶれが分かる。

トロントは、第2次世界大戦中の内陸強制移住の結果、カナダでは日系人が最も多い都市で、現在その数は6万人を越えている。またテレビをみると、通常のチャンネルでポルトガル語のニュース番組があったりして、聞くとブラジル外ではポルトガル・コロニアの多い地域のひとつだという。隣接してフランス語圏を擁することも、カリブ海地域をはじめとしたラテンアメリカ地域との独特の情報チャンネルをもっていることを意味している。

ラテンアメリカ研究というと、現地かそれとも米国、英国といったところがまず思い浮かぶが、空気が実にさわやかなカナダ辺りから、じっくり観察するのも悪くないなど感じたしたいである。（堀坂浩太郎）

住所：4700 Keele Street, Ontario,  
Canada M3J 1P3  
電話：416-736-5237、FAX：416-  
736-5737、Email : CERLAC  
@YORKVM 1. NETNORTH

## 7. 学術・文化情報

### ○対ラ米医学協力の研究会発足

東京女子医科大学国際環境・熱帯医学教室の大原久美子氏を運営委員長として組織された「ラテン・アメリカ国際保健研究会」が、昨年10月12日に第1回研究会、読書会および全体会議を同大学内で開催し、本格的な活動を始めた。会員加茂雄三氏が「ラテン・アメリカの歴史と文化」という講演を行った。

同会は、「ラテン・アメリカにおける国際保健についての研究、現場の各種プロジェクト間の連携強化の促進、および将来の国際保健協力の人材育成に貢献することを通じて、ラテン・アメリカにおける日本の国際保健医療協力の発展途上地域に貢献することを目的としている。

連絡先は 〒162 東京都新宿区河田町8番1号 東京女子医科大学国際環境・熱帯医学教室 大原久美子

### ○学術振興会サンパウロ事務所長の選考

学術振興会は、昨年12月15日にサンパウロ連絡事務所長の公募を締め切ったが、その結果、河野彰氏（大阪外語大学外国語学部助教授）を候補とした模様である。候補者の選考過程では、本学会理事長にも参考意見聴取がなされた。

### ○10月にサンパウロで SOLAR 大会

ラテンアメリカ・カリブ研究ソサエティ (Sociedad Latinoamericana de Estudios sobre América Latina y el Caribe、SOLAR) の第5回大会が10月16日から20日までの予定で、ブラジルのサンパウロ大学で開催される。大会全体の共通テーマは、El Brasil y América Latina y los desafíos del nuevo orden mundial。関心のある方は、Dr. Sedi Hirano, Coordinador de PROLA M, Universidade de São Paulo, Rua do Anfiteatro 181-Colmeia, FAVO 15, 05508-900, Cidade Universitário-São Paulo, SP, Brasil. Tel. 55-11-815-0167, Fax. 815-0167 まで。

### ○日伯修好100周年記念シンポ

今年は、1895年11月に日本とブラジルの間で修好通商航海条約が締結されてから100年

を迎える。それを記念して外務省、ラテン・アメリカ協会、日本ブラジル中央協会主催のシンポジウムが3月28日、東京・三田の三田共用会議所で開催される。ブラジルからは日本・太平洋学会のジルソン・シュワルツ会長ら4人が出席する予定。詳細はラテン・アメリカ協会(03-3403-2661)まで。

## 8. 近着会員業績

〔抜〕奥山恭子「チリの養子法の変遷—『子どもも売買』から国際養子への道」(帝京大学国際文化学科『帝京国際文化』第7号、1994年2月)

〔抜〕同 上 「階層間格差にみるラテンアメリカ家族の法」(日本家政学会『家族関係学』第13号)

〔抜〕古山英二「O E C D25番目の加盟国メキシコの実態」(『THE COMPASS』1994年6月)

〔抜〕同 上 「メキシコ経済の現状分析」(『THE COMPASS』1994年9月)

〔籍〕Munehiro Kobayashi, *Tres estudios sobre el sistema tributario de los mexicos*, Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social, 1993.

〔抜〕新木秀和「エクアドルの国家形成と地域問題—19世紀におけるグアヤキル地域主義の台頭—」(歴史人類学会『史境』第29号、1994年9月)

〔抜〕青木芳夫訳「呪術師と悪魔(エクアドルの民話4)」(ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ特集シリーズ14』1994年11月)

〔抜〕青木芳夫「オゴルマン『アメリカの発明』を読む」(ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ』第29号、1994年12月)

## 計 報

会員の木田和雄さんが昨年9月5日食道癌にてお亡くなりになりました。ご生前の研究を悼み、心よりご冥福をお祈りいたします。

なお、夫人より退会の連絡とともに「生前入会中のご交誼を深謝しますとともに学会の発展ご活躍をお祈り申し上げます」との一筆がそえてありました。  
(理事会)

(第71回理事会承認)

## 9. 事務局から

### 1) 寄贈図書

〔冊〕『ラテンアメリカ・レポート』Vol. 11  
No.3 (アジア経済研究所、1994年)

〔冊〕*Relaciones cívico-militares y  
democracia en América Latina en los  
años 90*, Sociedad Latino-Americanos,  
1994.1 (Simposio Internacional)

〔抜〕S. Schipani, "The general principles of law and the foreign dept",  
*Editoriale Scientifica 1990-1991*

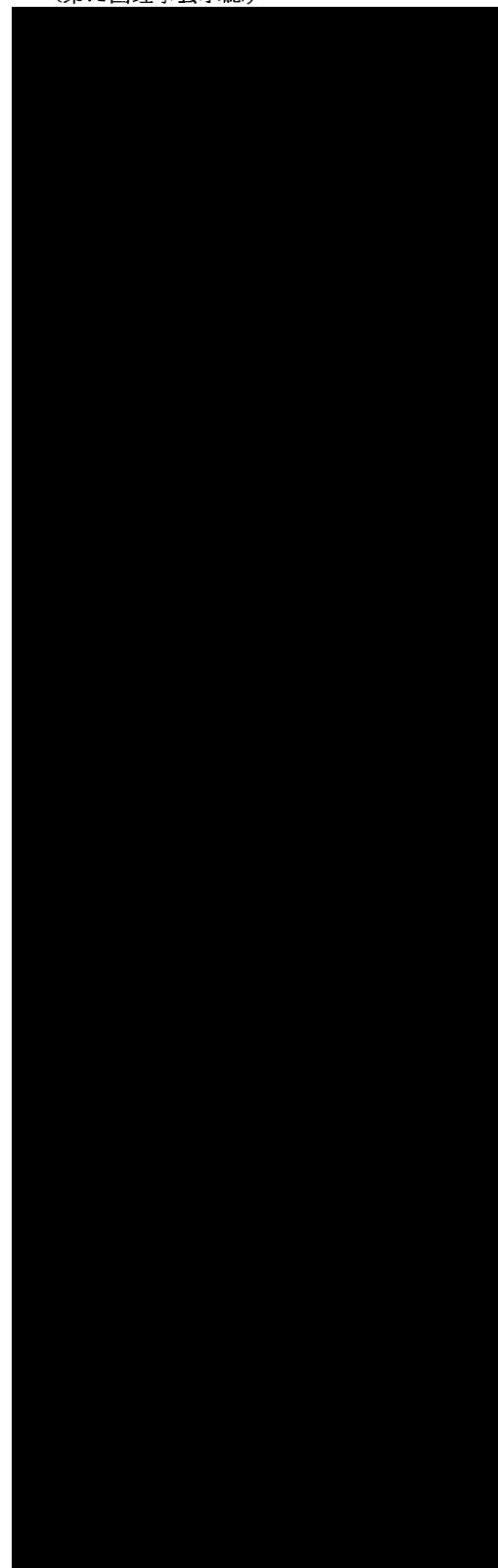
*Yearbook*, University of Rome II

Department of Public Law.

〔冊〕*Cuadernos Hispanoamericanos* 529/  
30, Instituto de Cooperación Ibero-  
americana, 1994.7・8.

*Cuadernos Hispanoamericanos* 531,  
532, Instituto de Cooperación Ibero-  
americana, 1994.9・10.

### 2) 新入会員（第70回理事会承認）



### 5) L A S A の会費納入を

学会事務局では、米ラテンアメリカ学会（L A S A）への95年度（1-12月分）の会費納入を代行しているが、1月10日現在、加入133名のうち64名しか振り込まれていない。関係者は至急、郵便振込（口座名：日本ラテンアメリカ学会L A S A、口座番号：00360-7-38186）に振り込んでいただきたい。会費は教授等5720円、専任講師・助教授等4620円、大学院・退職者等2640円。

なおこの件に関する問い合わせ、あるいは新規加入を希望する方は学会事務局まで、F A Xにてお願いします。

### 編集後記

今年は戦後50年にあたるので、元旦からN紙の「日本人」、A紙の「戦後50年 深き淵よりドイツ発日本」やC紙（東京ではT紙）の「戦後50年光と影 アジアと日本」の連載が始まった。私の知る限りでは、「戦後50年 ラテンアメリカと日本」という連載はなく、まことに残念である。

しかし、12月9日-11日にマイアミで開催された米州34ヵ国首脳による米州サミットで合意された2005年までの交渉期限で成立が予想される米州自由貿易圏（F T A A）は、その規模の大きさから日本にとっても十分に衝撃的であった。また、正月早々メキシコのペソの大幅下落でブラジルやアルゼンチンにも株価の下落が広がったと各紙は伝えていて、とても心配になったが、1月初じめの時点では、日米加欧によるメキシコ支援融資が早急に実行されそうな様子である。

ラテンアメリカと日本の関係はもう運命共同体のレベルに近づきつつあるのかな、と感じた年頭であった。  
(浅香幸枝)

No.52 1995年2月10日発行

▼466 名古屋市昭和区山里町18番地

南山大学ラテンアメリカ研究

センター気付

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎ 052-832-3111

Fax 052-832-5490

(同大学国際課気付)